

カンボジアの願い 国際交流基金理事長 安藤裕康

2014/11/12 付

今年の東京国際映画祭は、新機軸の一つがアジアとの交流を深めたことだった。

その中で、今後活躍が期待される新鋭に贈られる国際交流基金特別賞は、カンボジアの女性監督、ソト・クォーリーカーさんが獲得した。彼女の長編デビュー作「遺されたフィルム」は、1970年代のクメール・ルージュによる百万人を超える大量虐殺を取り上げている。この非人間的な出来事を扱った映画は既に幾つかあるが、「クォ」監督は、むしろ自国の歴史をめぐる新旧両世代の断絶を前面に押し出した。カンボジアでは、年配者はこの暗黒時代の恥部を語りたがらない。だから若者は親たちの悲惨な経験に無知なままだという。自らも父を殺された監督は、新旧両世代がおぞましい歴史をあえて直視した上で、過去を乗り越えて共に前進する大切さを描いた。

もうひとつのテーマは、クメール・ルージュによる芸術文化の破壊だ。かつてシハヌーク国王が先頭に立って栄えた映画の伝統も、徹底的に破壊された。その再生への願いが本作品の核になっている。「クォ」監督は、日本映画の巨匠たちの手法から多くを学んだと述べて、日本はカンボジアの映画人の育成や、古いフィルムの収集・保存などに協力して欲しい、と力を込めた。

日本は、これまでカンボジア紛争に様々な形で関わってきた。和平への貢献、PKOの派遣、経済復興の支援、遺跡の修復などである。今や日本は、「クォ」監督の言うように、文化面で一層積極的に協力する時期に来ている。来月カンボジアで開催される国際映画祭では、今回の作品がオープニング上映されるという。これを皮切りに、日本との交流が進展するよう望みたい。